

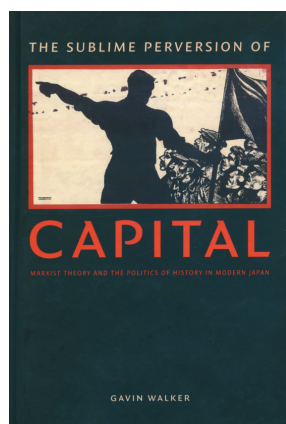
ギヤヴィン・ウォーカー

『資本の崇高な「変態」』

——近代日本のマルクス主義理論と歴史のポリティクス』

Gavin Walker, *The Sublime Perversion of Capital: Marxist Theory and the Politics of History in Modern Japan*

磯前 順一



Duke University Press, 2016

ギヤヴィン・ウォーカーはコーネル大学で文学博士号を取得し、現在カナダのマクギル大学で准教授として教鞭を執っている。博士号のアドヴァイザーのひとりとはコーネル大学の酒井直樹である。

その経歴からも、ウォーカーがいわゆるシカゴ学派と呼ばれるアメリカの日本研究の流れを汲む研究者であることが察せられる。

シカゴ学派を代表する日本研究者には、テツオ・ナジタ、ハリー・ハルトウーニアン、酒井直樹、ヴィクター・コシユマンらがいる。その理論的立場は、マルクス主義であつたり自由主義であつたり、あるいはポストコロニアリズムであつたりカルチュラル・スタディーズであつたりと、人によって相異なる。しかし、「実証主義が中立的である」というような単純な客観主義的な立場は取らず、現代の社会状況へと批判的に介入する批評理論に何ら

かの形でコミットしている点で、シカゴ学派としての共通性が見られる。

それは、この学派の推進者たちの多くがアングロ・サクソン系のアメリカ人ではなく、アジア系のマイノリティであつたことともあながち無関係とは言えないだろう。言うまでもなく、マイノリティこそ自らの属する社会の歪みに自覚的にならざるを得ない人たちだからである。

この学派を背景として、ウォーカーは本書『資本の崇高な「変態」——近代日本のマルクス主義理論と歴史のポリティクス』を著した。第一章で述べているように、マルクスの資本論はアジアにどのように適応しうるのか。それを資本論という「原理論」と、「民族あるいは国民」(nation)という歴史的な「段階論」のあいだ

で考察しようと試みる。それは、日本における「唯一の重要な理論家」とも評されるマルクス主義経済学者の宇野弘蔵の仕事を通して、日本の近代を再検討するとともに、アジア発のマルクス主義理論の可能性を、その歴史的文脈の中で模索したものである。

ちなみに、宇野によれば、生物学の用語である「変態」(perversion)とは、「例えば蚕が卵から孵化して幼虫になり、蛹になり、蛾となつて卵を産んで死ぬるまでの姿を変える過程」をさす^①。その変態には「商品の変態」と「資本の変態」などがあるが、本書のタイトルをなす「資本の変態」とは「価値の増殖をなす自立的な運動体」、すなわち資本の運動によって生み落とされたプロレタリアートという主体がその資本の運動によって疎外される過程を意味するものでもある。

一八九七年に生まれた宇野はマルクス主義の論客として、東北大学と東京大学で一九三〇年代から一九七〇年代まで日本の経済学をリードした。彼は多くのマルクス主義者と異なり、マルクスのテキストを正典視することなく、『資本論』で描かれた分析をその後の資本主義の展開である金融資本論と帝国主義論、あるいは恐慌論の「現状分析」から理論的に読み直していった。

シカゴ学派といえば、評者もハリー・ハルトゥーニアンとの共編で『マルクス主義という経験——一九三〇—四〇年代日本の歴史学』(二〇〇八年)を刊行している。そこで取り上げたのは、主

に渡部義通を中心とする『日本歴史教程』グループであった。『日本歴史教程』は、一九三六年から三七年にかけて刊行されたマルクス主義史観に基づく原始・古代日本の歴史書である。この本が天皇制国家の歴史を扱わざるを得なかった理由は、万世一系という歴史的由緒を説く天皇制に思想的批判を加えるためであり、そこに近代日本ならではの事情を見ることができよう。

ここでは、『日本資本主義発達史講座』が先駆けて一九三二—三三年に刊行されていたにもかかわらず、マルクス主義と歴史学の関係に焦点を当てようという目論みもあつて、同書をめぐると日本資本主義論争はほとんど扱うことはできなかった。それが、同じシカゴ学派の流れを汲むウォーカーによって、現代思想の視点から本格的に再評価する試みがなされたのである。この書評では、日本歴史教程グループの流れを汲む研究を射程に収めながら、ウォーカーの議論に沿って宇野による資本主義論の特質を明らかにしていきたい。

労農派と講座派の違いは、第二章でウォーカーが振り返るように、日本資本主義論争をとおして明確な姿を現わした。それは日本の明治維新が絶対主義革命であつたのか、ブルジョア革命であつたのかという主題をめぐつての論争であつた。講座派が主張するように、明治維新が天皇制という絶対主義王権を軸とする絶

対主義革命であつたとすれば、明治期の日本はいまだ十分な資本主義段階に移行していなかったことになる。イギリスをモデルとする西ヨーロッパに比すると停滞した社会であり、ブルジョア革命を遂行しなければ資本主義が実現しない社会と考えられた。他方、有産市民による革命であるブルジョワ革命であると労働派のように理解すれば、日本はすでに資本主義社会に移行していたことになる。天皇制は絶対主義國家のシンボルではなくなる。

しかし、本書でウォーカーが議論の軸に据えた宇野弘藏は、一般的には労働派と看做されていたものの、本人自身は講座派か労働派かという二項対立を拒否した。それゆえに、日本の資本主義を帝国主義という世界的状況の中で成立したものと定義し直すことができたのである。ウォーカーは宇野を取り上げること、ステレオタイプの二項対立的な資本主義理解を退けようとしていた。

この議論は、日本における「後進性」(backwardness)をどのように捉えるかという問いへとウォーカーを導いていく。それが本書の題名『資本の崇高な「変態」』——近代日本のマルクス主義理論と歴史のポリティクス』の由来である。言うまでもなく、著名なラカン派のマルクス主義者、スラヴォイ・ジジェクの『イデオロギーの崇高な対象』(一九八九年)を意識した命名である。

カント哲学に由来する「崇高」(sublime)とは、宗教的経験の崇

高さを含意するものであり、ウォーカーは「無限に循環する資本の動き」を言い表わそうとした。他方、「変態」はそうした崇高なる働きに反するような、「物神化された資本の制御不能さ」を捉えた言葉である。この物神化は、「資本関係の外化」⁽²⁾として「資本は常に利子を生む」働きを指すと宇野は説く。それを引き受けて、教え子でもある柄谷行人は、「神秘性の根源は、商品の価値が関係の体系においてあるにもかかわらず、単独に切りはなされたものとして存在すると考えられるところにある」⁽³⁾と、後に触れる価値形態論の観点から明快に説明している。

こうした崇高と変態との「逆説的」性格が資本の特質だとウォーカーは宇野から学んだのである。そのなかで、プロレタリアートという主体が資本の逆説的な動きにどのように介入できるのかを、ウォーカーは本書で答えとして導き出そうとする。しかし、彼の言う「逆説」が本当に「崇高」と「物神性」の関係の説明になっているかどうかは心許ないところである。その点はウォーカーが念頭に置くジジェクの説明、「崇高なるもの」とはある対象の逆説なのである。すなわち対象は、表象の領野そのものにおいて、表象不能なもの大きさ(量)を——否定的な形で——目に見えるようにするのだ」⁽⁴⁾を引用して補っておきたい。

さらにジジェクはカントの崇高概念にラカンを重ね合わせつつ、「崇高なるもの」は「快感原則の彼岸」にある。それは不快その

ものによって獲得される逆説的な快感である（これこそが享樂「……」の厳密な定義であり、ラカンの下した定義の一つである）と、自らが生み落としたプロレタリアートという主体を疎外する資本の大文字の他者としての享樂者の性質を指摘している。すなわち、主体が情動の次元から搾取^{さいしゅ}されていることの説明である。

こうした主題のもと、本書の問題意識を明示する「第一章 資本の崇高なる逸脱」、特殊と普遍という二項対立を批判的に俯瞰^{ふくかん}する「第二章 封建遺制と歴史の外部」、資本の原始的蓄積を通して近代民族の起源を問題化する「第三章 原始的蓄積、あるいは起源の論理」、労働力が商品化されることの不可能性と、それゆえに生起する主体化の潜在力を論じた「第四章 労働力——資本の閥^{いさ}」、特殊性と普遍性の関係をグローバル性と、日本特有の農業問題を含む国民性との逆説的關係のもとで考察し直した「第五章 歴史の大陸と理論の内部」、歴史的現象としての民族の性格を論じた「第六章 「レディメイドな資本の世界」と、宇野の資本主義分析の論理を再解釈するかたちで、各章が展開されていく。

アジアにおける後進性の問題は、当初より日本のマルクス主義歴史学の大きな課題であった。そもそもアジア的な後進性の問題は、一九二〇年代後半からソ連の歴史学において中国の社会主義革命の戦略をめぐる問題として大きな関心を呼んだ。そのときの論拠とされたのが、『経済学批判』「序言」（一八五九年）の、「経済

的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョアの生産様式をあげることができる」、そして『資本論第一巻』（一八六七年）の「国家は最高地主」と記したマルクスの文章であった。

そこでは、アジア的生产様式とは共同体を単位とする所有が強く、個人や家族を単位とする私的所有はいまだ不十分とするものと考えられた。この生産様式に著しい関心を示したのが、日本におけるブルジョワ革命の未達成を説く講座派であった。宇野と同じく東大法学部で教鞭を執った山田盛太郎や平野義太郎が代表的な論客である。

他方、本書では触れられていないものの、『日本歴史教程』グループの渡部義通や石母田正らは、アジアを後進地域として理解するのではなく、固有性として再解釈しようとした。彼らもまた日本共産党のシンパである点で、講座派と同じように近代日本を天皇制絶対主義のもとに捉えていたが、それを古代以来の共同体遺制に由来するとは必ずしも考えなかった。しかしその一方で、天皇制を日本の歴史を貫徹する奴隷制的遺構と捉え、その歴史的起源を暴こうとしていた。しかし、この興味深い思想的批判を企てた『日本歴史教程』は戦後ほとんど復刊されることがなかったため、講座派との理論的立場の相違が具体的に検討される機会には恵まれてこなかった。

戦後になると、やはり本書では議論の対象外になっていくマルクスの遺稿『資本制生産に先行する諸形態』（一九五七―五八年）で「原始的」（primitive）所有として挙げられた「アジア的・スラブ的・古代的・ゲルマン的」、そして「東洋の総体的奴隷制」の関係をめぐる記述を踏まえて、総体的奴隷制がアジア特有の「特殊」なものなのか、それとも世界中に共通する「普遍」（universal）なものなのかが議論された。もちろん、この総体的奴隷制の頂点に位置するのが天皇制だと、マルクス主義歴史学者たちは、その定義がどのようなものであるかにかかわらず、考えていたのである。

『諸形態』の文言を踏まえ、戦後のマルクス主義歴史学者たち、特に安良城盛昭や河音能平はアジアとヨーロッパを異なる生産様式の継起的展開を経た歴史と捉え、複数列の歴史発展像を作り上げようとした。一方、原秀三郎や芝原拓自は地域的な多様性を踏まえながらも、単系列を軸として世界史の基本法則を前面に押し出した。彼らの歴史学についてウォーカーは触れていないが、「普遍と特殊」という二項対立概念の問題性については、宇野の仕事を継承する形で主題化している。

講座派はマルクス・エンゲルスの著述に倣^なつて、イギリスを中心とする西欧の近代化モデルが普遍であると看做した上で、アジアをその「後進性」という「特殊性」（particularity）の相のもとに

捉えた。原や芝原ら単系発展説を取る立場もまた、同一の時間上の先行型である西欧と、その逸脱型であるアジアという理解の点では、やはり普遍と特殊という理解を取っていた。労働派にしても、宇野からすれば、明治維新をブルジョワ革命として規定した上で、その後進性を否定しがたいものと認める点では講座派と立場を同じくする。

それでも評者の理解するところでは、アジアのすべての地域が後進的であると理解する立場は、日本では少なかった。日本はアジア的な特殊性の一部でありながらも、『中世的世界の形成』を執筆した石母田正のように、日本は特殊なアジアの後進の世界を離れ、普遍的世界に参入する道を選ぶという理解も一般的であった。あるいは平野義太郎のように、マルクスをウィットフォードの水の理論と結びつけることで、日本をアジアの中の例外として、その後進した世界を打ち破る覇者として思い描く者もいた。それが、かなりの数のアジア的生産様式論者たちが八紘一字を唱える大日本帝国主義者に転向した理由でもあった。

だが、宇野の研究にとつての核心は普遍と特殊という対概念ではなかった。従来、西洋という具体的な地域を普遍視したがゆえに、それに合致しない地域が逸脱としての特殊性に認定されていた。特殊性とは文化本質論を前提とする立場であり、その文化の本質は永遠に変わらないとする理解の上に立つ。ここに特殊が普

遍からの逸脱であり、永遠に後進性に留まるものと見なされる根拠があった。

この二項対立の概念に代えて、宇野は「原理論」と「段階論」という問題枠を提示する。段階論と原理論の関係は宇野においては新カント派の認識論に基づくものであったが、ウォーカーのよいうにポストモダンの哲学者ジャック・デリダの正義論になぞらえて理解する時、その理解はさらに容易なものとなる。正義あるいは真理と法、それは原理と段階の関係に対応するとウォーカーは考えた。原理とはマルクスの提示した唯物史観の普遍的法則であり、それゆえにどの地域にも現前することのない不可能性(impossibility)——宇野自身は「無理」という術語を用いる——の理念であるとともに、反復可能なものとされた。他方、段階論は各地域における歴史的発展の具体的諸段階を扱う。現前不能な原理が各地域の状況のもと、固有の形で分節化された局所性の問題を扱う議論を指した。

ここにおいて、普遍と特殊の関係に関する認識は根本的な変化を遂げる。文化本質論としての特殊性およびその裏返しとしての普遍性という二項対立的な概念も成り立たなくなる。代わって、すべてが現前不能な普遍の歴史的顕現たる「特異性」(singularity)として、その「不均質さ」(unevenness)が把握されることになる。ロシアの農村共同体のミールも日本と同様に後進性ではなく、特

異性として位置づけられ直される。同時に、西ヨーロッパを普遍とする視点は、歴史の中で分節化された「幻想」(fantasy)にほかならないことが明らかにされる。

ただし、幻想であることをもつて悪いとしているわけではない。精神分析家のジャック・ラカンの立場からすれば、あらゆる認識は幻想であるがゆえに、情動的なリアリティを有する。ウォーカーが指摘するように、情動こそが経済構造に立脚するネイションに現実感を付与するもののだ。それが他者の搾取や排除を正当化する唯一の「正義」を名乗る時に問題が生じるのである。

現前しない普遍性が分節化されるとき、近代においては「民族」(nation)という形態をとつて固有の特異性として立ち現われざるを得ない。だから、「資本の原始的蓄積」(primitive accumulation)を扱う第三章では、世界史の基本法則である資本が国民という特異性の形成を通してこそ現われ出る過程を、ウォーカーは宇野に導かれて思考する。特異性としての民族論が一九五〇年代初頭にマルクス主義歴史学を席巻した論争において、羽仁派の井上清やその流れを汲む北山茂夫が、戦前の軍国主義体制を想起させるものとして民族概念を退けたのに対して、渡部義通派の藤間生大や石母田正が民族とマルクス主義を結びつけた言動の中にも鮮明に見て取れる。

ウォーカーの視点に立ったとき、羽仁派は特殊と普遍の二項対

立の枠組みで考える普遍主義者であり、自らの鬼子としての特殊主義者を藤間らに見出していたことが分かる。それは羽仁が日本をアジア的な後進性のもとに捉える立場にあつたことも符合する。しかし、藤間らが果たして特殊主義者であつたかどうかは別の問題である。こうした要素を含みながらも、民族問題を特殊性の理解へと開こうとしていたことも、後の藤間の東アジア論への展開を鑑みたときに明らかになる。だとすれば民族主義者という批判は、民族問題を扱ったから不適切だという意味ではなく、その特殊性を特殊性として論じた場合に批判されるべき事柄なのである。

ただし、天皇制の歴史的由緒の正しさを否定する立場を説くマルクス主義歴史学者は、自らの立場のほうが天皇制よりも古い、民族本来の立場を代理表象する立場に立つという言説に呑み込まれていく。実のところ、言葉足らずながらも羽仁派のマルクス主義者が懸念したのは、そうした歴史的本来性を説く立場こそが天皇制の論理と何ら変わりのないものであるという点であつたと推察される。

たしかに、議論が同質性の上に傾いたときに、物神化という名のもとに歴史的解釈の実体視も起こり、宇野が唱える解釈学としての社会科学が大きく後退していく。それは経済学のみならず、歴史学においても見られる。藤間や黒田俊雄が懸念したごとく、

マルクス主義の実証主義化が一九五〇年代後半以降の石母田正によつて先陣が切られる形で起こつた。それは、六全協を境とする性急な政治運動としての日本のマルクス主義が敗北を喫したこととほぼ軌を一にする。

宇野とデリダを重ね合わせることで、講座派と労農派の対立を脱臼させ、唯物史観をポストモダンの脱構築論から再定置したところに、ウォーカーの議論の特筆すべき点がある。ただし、ポストモダンの理解が持ち込まれることで、各地域の多様性をもつばら説く通俗的な相対主義の立場も現われる。もちろん、地域の多様性は今では誰しも承知している。ただ、それを原理的な立場から指摘しても、その不平等な歴史的現実は何ら変わらないことも、同様に周知の事実である。

むしろ問われなければならないのは、多様性を「後進性」として認識せざるを得ない世界的状況、植民地支配の構造なのだ。「幻想」とは吹けば飛ぶような認識の表層的な誤りではなく、この言説の内部に属する人間の主体を同質的なものに構築する、情動に立脚した言説に他ならない。こうした経済構造の中に投企されているがゆえに、後進地域は自分たちもまた「普遍」の一部に到達しようとする。他方、帝国の宗主国側は、後進地域を近代化することを帝国の使命として正当化する。

資本の動きが作り出した植民地状況が、その状況を「後進性」

と呼ばれるを得ない認識を作りだす。マルクス主義による経済学批判の肝がそこにある。下部構造なき上部構造論では観念的なヒューマニズムに留まり、資本主義の現状分析に基づく有効な社会批判を行なうことはできない。宇野がレーニンの帝国主義論やヒルファディングの恐慌論をマルクスの資本論と併せて批判的に読まなければならなかった理由も、そこにある。

ウォーカーや宇野による認識論的な実体主義の脱構築は、社会科学としてのマルクス主義理論の位置付けを大きく転回させる。しかし、それは講座派だけでなく労働派も含めて、少数の研究者にしか理解されなかった議論でもあった。一九六〇年代から七〇年代にかけて、同じようにマルクス主義経済史学を牽引していた芝原拓自と宇野との違いもそこに見出すことができる。芝原は講座派の流れを汲む堀江英一や羽仁五郎の影響のもと、盟友の古代史学者、原秀三郎の力を借りて、原始共産制から奴隷制・農奴制を経て近代資本制が成立する歴史的過程を復元した。芝原と宇野では、社会構成体および歴史に対する見解が明らかに異なっていたのである。

芝原もマルクス主義を自然科学のような客観性になぞらえたエングелスの『家族・私有財産・国家の起源』（一八八四／一八九一年）には、一定の距離を置いていた。しかし、「国家的奴隷制」という独自の概念に端的に見られるように、古代史学者の原が朋友

ということもあり、所有形態をめぐる歴史的な「起源」を探ることとで、当時の世界的状況と交差させつつ、日本近代社会の後進性の理由を説明しようとしていた。日本の資本主義の後進性の原因を、前近代の所有形態、すなわち「アジア的」と呼び表わされるものに求めようとしていたのである。

歴史的起源への固執、そこに万世一系を説く天皇制国家のくびきの下に生きざるを得なかった戦前、さらには戦後の日本社会ならでは問題状況があった。国家側が天皇制の歴史的古さを説けば説くほど、それを批判するマルクス主義者もまた自らが代弁する民族の由緒の正しさを説かなければならなかった。そこにマルクス主義が近代日本において歴史学、なかでも古代史研究と密接な接合を試みなければならなかった理由があり、総体的奴隷制を論じた『資本制生産に先行する諸形態』が日本歴史学においては『資本論』以上にもてはやされた理由がある。その意味で、マルクス主義歴史学とは、まさに近代日本固有の状況——必ずしも「特殊性」として捉える必要はないが——が生み出した言表行為であったのだ。

だから、そこで復元された各時代の生産様式はあくまでエングルス流の社会科学であり、認識と現実とは限りなく重なり合うのが科学であるという立場に変わりはなかった。一方、現実認識の可能性を学問の根底に据えていたのが宇野であった。さらに言え

ば、一九三〇年に共産党を追放された哲学者の三木清であつた。

彼らにおいては原理論と段階論と同じく、その認識論も現象と認識の二重性からなる。その流れは柄谷行人の価値形態論へと継承され、酒井直樹の脱構築論と相俟^{*}つてウォーカーのポストモダニスト的なマルクス主義理解に大きな刺激を与えている。

その点で注目されるのが、柄谷行人が価値形態論を展開した論文「マルクス その可能性の中心」（一九七四年）である。柄谷は東大経済部の学生時代に、宇野のもとでマルクス主義経済学を学んだ。柄谷は宇野の価値論に、ウォーカーに先駆けてデリダ的解釈を施し、異なる使用価値をもつ商品交換から生じる「差異の戯れ」として貨幣というシニフィアンを理解した。

宇野の価値論については、本書が意を尽くしたものになっているとは言いがたいが、柄谷の再解釈を読み合わせることでその議論の不十分さを補なうことはできる。柄谷は「価値について考えていくと、ある二つの異質なものが等価であるという根拠はなにか、という問いに行き当らずにいない」として、次のように自己の理解を開陳する。

商品とは、それぞれ内面的な「価値」をもつかのように見えるが、すでに、それらは貨幣形態が与えた形而上学にすぎない。商品の根底に価値があるのではない。根底そのものが不在な

のであり、そこにあるのはシニフィアンの戯れなのだ。⁽⁶⁾

宇野の価値論は労働力が商品化されたことで資本主義が成立することを説く。この議論を柄谷は、資本の「原始的」(primitive)なあり方を同質的なものとしてではなく、異質的な差異の場として捉えた。それが同質化されたときに、貨幣のフェティッシュ化が起こり、労働力を担う人間が疎外されることになるのだ。

そのため本書第四章では、部分的な形であるにせよ、原始的蓄積のメカニズムを分析するために、農民の土地を囲い込むことで生じた不定形の労働力を商品化することの不可能性——宇野自身の言葉を用いるならば「無理」、ウォーカーの言葉では「閾」(threshold)——が、外部を内部に折り畳んでいく働きと、商品化された労働力を生産過程に開いていく働きの二重の働きと捉えられると論じている。そこでウォーカーはドゥルーズ的な^{ひだ}襞の思想に依拠して、労働力の商品化を再定義したのである。

ただし、柄谷の議論が相対主義的な差異の戯れとして宇野の価値論を読むことに終始するのに対して、ウォーカーは労働力の商品化を収奪という原初的な暴力行為として読み取る。柄谷の価値論に対しては、国家の収奪という視点が欠如しているという指摘も今日ではなされている。

それは宇野の価値形態論を、主体を相対化するポストモダン思

想として解釈するか、主体のフィクション性を弁え^{わきま}つつも、その歴史的な搾取関係に着目するポストコロナル思想のもとに読み取るかといった、柄谷とウォーカーのテクストを取り巻く時代状況の違いとも深く結びついたものである。いまや時代の潮流は歴史性に拘束された主体を解放することよりも、溶解してしまった主体、すなわち「主体性なき主体」を歴史的状況のなかに再分節化する作業を求める状況にある。

そこにポストコロナル研究がもたらした主体化論が注目される理由がある。本書もまたその流れに棹^{さお}さす。ただし、そこで求められる主体化とは、ラカンの言うような、あくまで空洞なメタファーとしての主体であることを見過ごしてはならない。宇宙によるマルクス解釈の議論に従いつつも、主体の理解においてもウォーカーは、その働きを両義的な反復過程としてドゥルーズやデリダのポスト構造主義的な思考のもとに捉えているのだ。

さらに第四章の後半でウォーカーは、ドゥルーズの反復の思想に倣^{なま}って、プロレタリアートという主体の可能性を資本主義体制の内部に模索していく。その議論は説得的なものというよりは、その可能性を論理的な思考のもとに探るといふ萌芽的なものにとどまる。しかし、そこまで経済学的な下部構造論の次元で議論を展開してきたウォーカーの思索が宇宙を離れて、上部構造的な主体化論へと飛翔する契機を含むがゆえに、ここが本書における議

論の転換点をなす。

労働力の商品化が進むなかで、その担い手であるプロレタリアートという主体が形成されていくのは誰しも異論のないところであろう。彼らは安価な商品として資本主義生産様式に縛り付けられた存在であるが、同時に社会主義運動の担い手にもなり得る潜勢力を秘めた主体でもある。

評者なりの表現をすれば、物神化された資本という「謎めいた他者」の動きがあつて、労働力が商品化されることでプロレタリアートという主体が生まれる。その意味でプロレタリアートというのは自己完結した自律的な主体にはなりえず、資本の動きに対して何らかの捉え返しをしなければ、能動的な主体性は獲得できない。ウォーカーによれば、その捉え返しがかつては社会主義運動であつたということになる。状況に批判的に介入する主体性が、こうした制約された条件のもとだからこそ、生起^はする可能性を孕^はむのである。

この議論は、下部構造を前提とするなかで主体の生成を説く点で、下部構造から独立した上部構造を想定した石母田らの英雄時代論よりも説得的な可能性を有すると評せよう。下部構造決定論的なロシア・マルクス主義を克服するために、上部構造の相対的自立性を説く西欧マルクス主義の思想がいくつも唱えられたが、ウォーカーの議論には観念論に陥らない西欧マルクス主義の方向

性が、萌芽的にせよ、新たに明示されているのだ。

ただし、近代資本主義の価値論が、近代以前の所有論においてどのような対応を見せるのかについては、本書でも答えが準備されることがなかった。宇野は商品経済が近代以前にも存在しており、それが各時代の生産様式の純粹な原理形態をとることを妨げ、その生産様式を解体する働きをなしてきたと述べてはいる。しかし、奴隸制や農奴制が資本主義における労働力の商品化のように、何らかの独自の経済論理を有するものなのかは、分析対象が経済学としての資本分析であるがゆえ論じられてはいない。その点では経済学と歴史学の分断は、現在も一九三〇年代とさほど変わらない。

本書も含めて、起源の学としての歴史と差異の学としての経済学をどのように組み合わせるか。あるいは差異の学としての価値形態論をどのように史的唯物論の中に組み込み、歴史的起源の両義性を力動的に分析していくのか。すべてはこれからである。かつて野呂栄太郎と渡部義通が岩田義道のもとで共に志した唯物史観の『日本通史』を実現するためには、起源論と差異論の歴史的軸における組み合わせを「逆説的」なかたちで試行しなければならぬ。起源論は価値論の説く差異としてのシニフィアンという視点によって、歴史的本来性という論理そのものを解体する必要があるのだ。

この逆説性ゆえに、ウォーカーが言う「差異の中の同質」な時間性が、「同質の中の差異」ではないかたちで成り立ち得ることになる。しかし、この逆説性がなぜ崇高なる体験をプロレタリアートという主体にもたらすものになるのかについては、残念ながら肝腎な箇所であるにもかかわらず、ほとんど説明はなされていない。改めて検討が必要とされる箇所である。

なぜならば、崇高さはしばしば謎めいた他者によって享樂される苦痛に満ちた受難 (passion) という経験の形をとるからである。資本という他者に享樂される経験のもたらす耽溺性こそが、消費者という主体の成立をもたらすのであり、後進地域に位置づけられる人びとに、その低い地位を与えている主動因であるにもかかわらず、資本主義というゲームから降り難くさせているからである。

しかしこのような課題を抱えるからと言って、ポストコロニアリズムを基点としてポストモダンリズムのマルクス解釈を、歴史における主体化過程に着目して行なうことの大切さを本書が実践してみせたその成果はいささかも^{おとし}貶められるべきではない。西洋発のマルクス議論を日本という、ヨーロッパからは後進に見えた地域から生まれた理論的営為——本書では宇野のマルクス主義経済学——を通して、西洋発の理論を読み直し再編を試みた点に、本書の特質を見出すことができる。

それは酒井直樹が唱えるような、特殊性を前提としてきたアジアの地域研究が、普通の学あるいは特異性の学としての人文文学へと飛翔するための助走を準備するものともなる。あるいはナジタと並ぶシカゴ学派の領袖、ハルトゥーニアンが『近代によって超克される日本 (Overcome by Modernity)』(二〇〇〇年)において、柳田国男の民俗学と戸坂潤のマルクス主義風俗学を逆説的に接合させた日本近代批判論を、西洋中心主義に陥らないかたちで発展させる試みとして評価することも可能だろう。

ハルトゥーニアンこそ、マルクス主義歴史学者を含めて、近代日本社会に執りついて止まない歴史へのノスタルジアをデリダの亡霊学の立場から、根本的な批判を加えた学者に他ならないのだ。宇野からウォーカーに至る価値分析の視点を歴史的なマルクス主義批判にどのように結びつけるのか。それがこれからの課題である。著者と共に歩みたいと思う。

補記…本書評は、アンナ・ドゥーリナ、小田龍哉、宋崎の三氏との対話を踏まえたものである。三氏のおかげで、ロシア、中国、日本のマルクス主義を取り巻く状況の違いが、幾分なりとも理解することができた。記して感謝の意を表したい。

注

(1) 宇野弘蔵『資本論の経済学』岩波新書、一九六九年、一二七頁。

(2) 宇野『資本論の経済学』、一二四―一二五頁。

(3) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(一九七八)講談社学術文庫、一九九〇年、七二頁。

(4) スラヴォイ・ジジエク『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出書房新社、二〇〇〇年、三〇五頁。

(5) ジジエク『イデオロギーの崇高な対象』、三〇三頁。

(6) 柄谷『マルクスその可能性の中心』、一二〇頁。